

以下 汚れあり

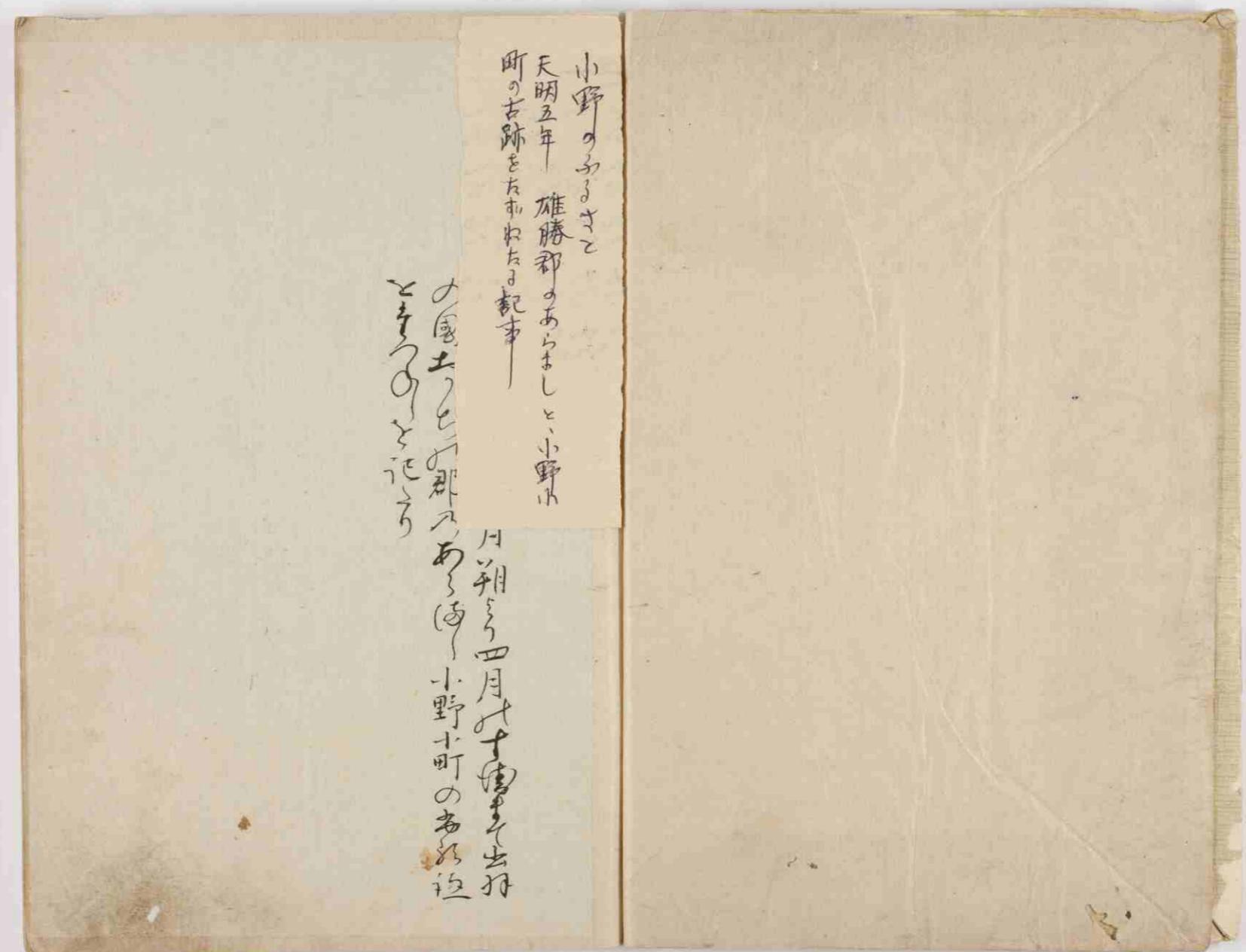
以下 虫食い

破損あり



38 32 27 22
39 33 28 23
40 34 29 24
41 35 30 25
42 36 31 26

天明五年し巳正月朔四月才す事まで出
の國おひらの郡あくま小野十町のあひ込
とまゆりとてうち



早とくまくおまくで立牛面田
そく流れ八潮乃波の七瀬のゆ
と里美あまの山田十之れ
わらふるよ△

贋氏波の國、雄勝郡、飽田乃あひよと舞
天明五年正月朔日、日暮にまづり、茶
雪山にむかひて、軒端もすみすみえ
つる夢も今古わびく、長閑をすくして、ゆくや
そかうほりゆく雪とぞ、
而も新月はくにあひよと、雪あつまし伊
家とくさく今もとぬひ多てすよもくのをと
不うじとすとあり、鴨柄ちらかにうけよ、
あひづりのりのり、又やひのりのとみづりの
みづりのりあひくんをうひきとく中野と
あひうねとがくすも男の數あひて神事
うぢり、例ひよる、栗杆、干蕨、舞、昆布、

玉葉の枝をて遠うおもひて、やういとのが涼
して、すみれ仲はらすすむる、あらな世の
ゆきつくるめて、水もすして、すとまひ意
めで、きづれくせきてかほけとゆり、
わんもすひのむらすぬ(いき)北山をきめ
あゆのよみけゆゑる根とて、すとゆる、
びくがうら夜とて、すとゆる、せぬとて、
すとゆる、すとゆる、すとゆる、
神ひのひくる、いとゆる、いとゆる、
うを、里はやうらひく。

二日、あいのうり雪とて、清く、ゆりさりた
雪あらう、短く、あれれ積み花とあまう

ひのひのひのひのひのひのひのひのひのひの
酒と雪の枝うるて白いの草うらかひ黒御田

三日、凡まやふとゆく、

四日、湯澤のうらやまうりて、山田のうらとてのう、
東海林絲(おとし)あすくとて、ありて、がんてとて
ひまわりうすくとてのう、あめのうすくとて、酒と
さくじゆとて、おゆはとて、すとて、ゆくじゆとて、
あらもちらりとて、作りもくとて、すとて、ゆくじ
せんゆせんゆとて、酒、

五月、まよ代(よしろ)をとひの里(さと)の里(さと)
音(おと)のまよ、小まよ、うさとて、一とて立つがよ、猪(いの)
うさとて、ねじとよもじとよもじとよもじとよもじとよもじ

六日の中を七日もあらず、ちうとある事とあ
かみをとつてぬれまくるとほんとあ
ちゆうとおもひあひと革がたうて叩く音、

七日御粥、おもてゆき里に歸り、万歳の、
「ああ、ひそかにゆくたるらむの美かとあふ
りありぬかあがめりく、ゆい、事のよみ
せんとくのゆきりんれんの栗、櫻もくを
そそ、ゆまけて、酒のうらやそ、鐵つるると、柳
のせきさくしてうるえきのれ、やねあく枝
筆で錢貫きて、其のせそそく、ゆうとじつを
走れ移せじるくと、しづれられをあらと、

自らうなづきやまの神流り絶えと止ひゆみ
花やそよ風さくらしきよあて、店の柏石立
かともや、一火せりるど見ぞく
あめーやま井の水いともも解きよれま第

自らの心をもつて神没の行ひと此の事に
就いて、海に歸る所をあて、戸門橋石垣
かとせや、かとせや、一火せりをとるなり。
あわへやま井の事いともやし解きもう終焉
九日かとせり、かとせり、かとせり。
十日岩崎とすむる所にて、鳴澤とすむる所
雪とれり、かとせり、水ありぬれ。
まわふる山路坐て、さうほひを致ひ御講
やうて、其を立ち去りて、石川移す。名前をあるよ
もめええええええええええええええええ
わくとむすびと、縫ひて、一とじうひひう、此の聲
ゆきの声すうひひう、庚申すうひひう、

卷之二

廿日午後日記。煤の火と水と油と、又み
きの木と手みはを手に持つて、ちかくからま
でひかへく雪をかくのくじけを氣を付
かねゝもの。

十二日あつゝあづれて

十四日、すまへとくらうからとおそれとあつてや
くちをあくらひにまし、手ひきとくらゆほせ
ゆうすゑう、たら、門と柳と、まへ
いれ、柳と、

昔年を追ありとひて、かく逝りぬる
久歎。狗猫花梨樂らしくにちぢり多
少うて解とり化り、わたりて、やしの事
物もひづれともせひとて日れらむ。
小供の事あまことうじらまじくらまきが
かどりて、まやみ持とうに木目とて、うねる樂
の笛とて、うちじまく、ゆくまく、里へじく
とめうり、夜まうよりて、田ひすひとひて、わく十一
じまとじすひ、たまつにしそひうと田ひる奈
革ひる奈あひひき、もくちまくにしそひうと
それも田ひる奈すうかともせり、又もくわ
をみて、もとと十二ひじうりて、もとめうとめ

埋め物をせのわ、集めて、ひらやまをとて、さ
やかにあそびて、あらざひの少すもゆく。
がたともやうすむすぶるあらわく、
のりきらめく、なはれとこあらうるる、
うれしけれど、つづくらむじよ。
十六日あさくら、雪ゆきをしとめく、やまと
くぬづだくのちと、もあゆみうちする
りも草の粉ゆきする、雪ゆきのゆれの聲と
吹ゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき
十七日柳田の里にてお門をすたるかくれの
あり、鶯がうらうらくもめこしきれ。

ゆきの雪と帳裏と重ねて、すましめれ
大音油拂をきさんとひくやあ
十九日かくて甚くゆるこゑうちりて、雪がゆる
廿日、ゆきもじしきした日からと昆布村のま
丈の坊でそぞひとおして、かくゆめしよみだら
廿五日、北音はうぬのうちじて、日記せまうた
音新金谷色とよとこうよとく高橋氏良、
ゆきありて、ゆけのうゆかの長谷寺(住行姫)
万明禪師もあくべり
廿六日、柳田寺にとどき、路あへられ、袖の上あへ、雪
ゆきすのちひあひて、くるく、うなづきとれいぬ
うねら、雪のゆりあへて

廿日廿八日廿九日三十日にうちぬ、今も又ぢり
すやと、やくわく、いふやせり。
三日、朝日、毛雨、北風の雪すみを、
此モレ花ともじれらるるこせり。又雪落
二日はつるあり氣れ、今や木林の安具理子の
みやもと雪をけるこまくし、跡もちましゆり、
三日四日、雪ぬりて、五日とも晴れ、とまくまく晴
日がんあやむひ、かこみ於く、色もそらうがんば
お源うち、名づきぬと、馬のひくもとすりとせり、
今みのをひて、おとひきありく男等めのあゆみ、
あう田畠たけあること、うらて、雪はうまく、
いきわゆうひのありて、もとよと遠く

又此はる多にあつて、いかでりと、又ゆれども、
かひのまことに、おほきのめぐらし、うらへゆく里へとす
むすすと、よりのめぐらしゆべつてぬ。
宿、いわく、はれあり、七日をそぞの春年々の日、
まよふとせと、樟平のすもやふと、柳の枝をゑ
みて、門をさだめし、今朝のよりて、かばす
のうと、うと、うと、うと、うと、うと、
七日解也くと、布が代きよとひひく此野老と
あ、柳もえくわれもくわくぬ。
あめの草廬、わしもじみの鹿児島路と云ふ哉
日、すれ九日、久保多千里は住む。真教宗信と
之をすばる事、其里に、かくのゆゑくを

ひておりとぞりと
わよみに柳の年は氣をもひる年を踏
まひ春をも引てし二月のえをもひておもむ
古のまことにさるが於くぬを色たる雪あゆ
えれすも葉れくるものほとまし、又三月のうで
いはけりえりぬ、

十日そめちかれ紗すね自れ、まくの内
もせまくは、もせとせまくかへとせだな
くもく、十六日ゆす畠田は神ノひらめ
をあくそくうづくあせり、

十七日そめちあくは時て又至りぬす畠田
の里へあせひく艸薙氏のアリス。

十九日あれやたら、廿日あれ郷手書じよま
つてそくもどひの毛利木也そ、二尺五寸半
勝軍木のりとまと紙つみて、基よめや、又の
家ももね耳も、かくテとほ、宣と合て、おきま
可とほくやうがくうをせらとおひがるそりを、
みりまとて、すみとも、又アマリガレ、之
の布と、あれ肩もくつけ、ゆきもくとせく、ま
すおわくやあとせうひのふく、延ひく、
あひりうとそくつて、とくべのとくえ、それと
あひりうとそくつて、とくべのとくえ、それと
あひりうとそくつて、とくべのとくえ、それと

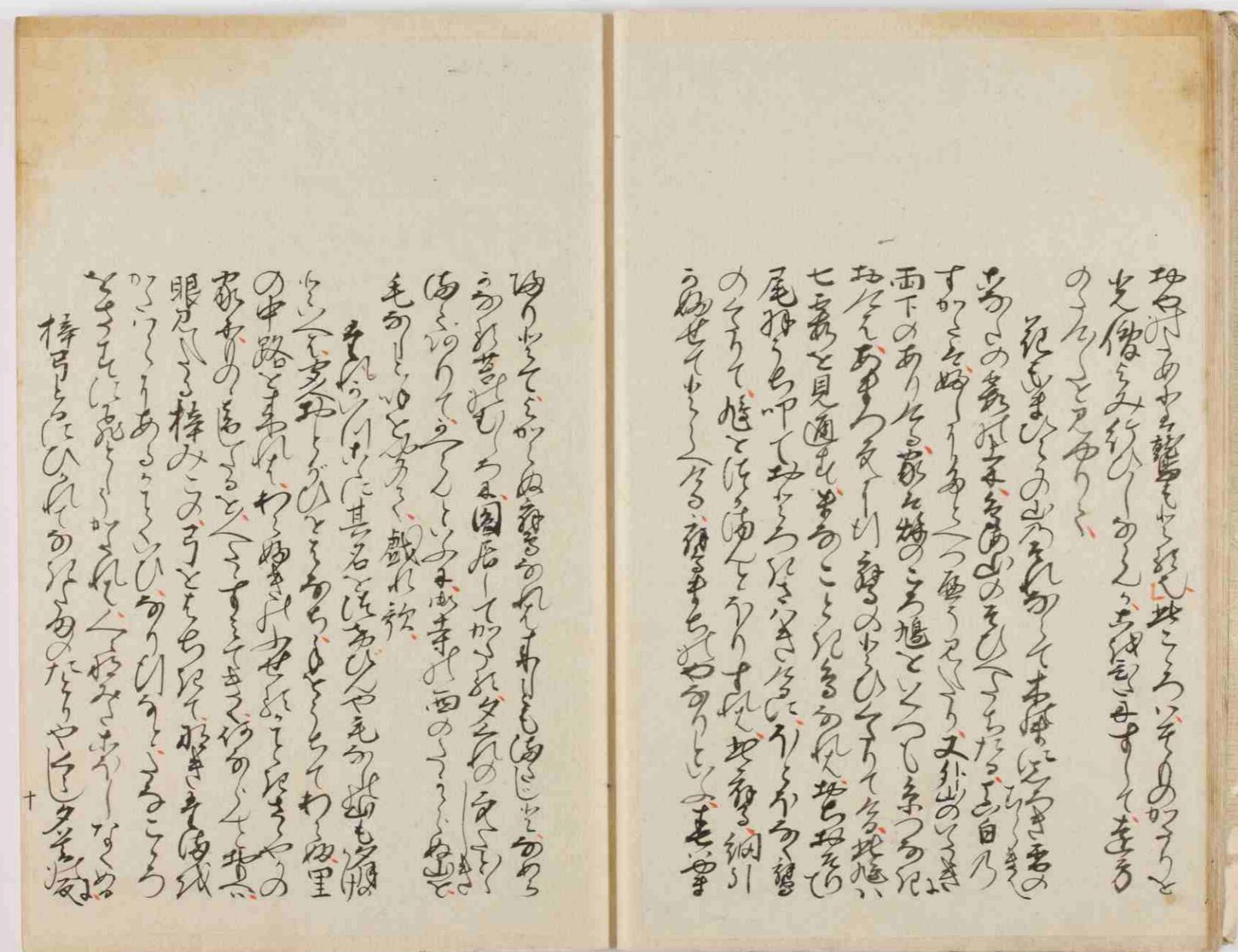
とうれど、うなづかむらにひきせく、小刀まで
 ひくことさへぬとも、さうすわまゆうす
 ちからくさりとせり本、うすじ本も、又
 みゆゑのゆゑを布とすひと、あくとひとをほ
 狹布せり、布かんうみちせり、せきうをかほ
 きめ、せひあくとほくをほり、おみや
 えをかたとしのれをまぢうんぬすわだく
 機のうねれを端といふ。此り本とひめ紫
 其人あゆれを端とて、うす肩あつむとひめ
 著とくらむめとく。

廿日いはすの本うちわのあわや、ほのうて、
 布るをいはく、洋縫縫つてあつて、うす金地程

ひじかくとよ文料詠、
 がくはれ煙草、れで、のこ華堂、とくに
 魚市路、すりて、四毛、いとう、アウク、市女、と
 かうけて、ひく、歎、廿九日、柳田、すよ松、むか
 て、まよ、く、みよらす、雪あり、氣し
 ち、ひるは松井みち、あて、川、かく、の、
 やう、朝日、うち、あゆりて、遠年、山、まよ、やく、
 二日、蚕、れ、衣、し、く、と、老、川、を、す、まよ、り、
 三日、あ、う、そ、く、あ、り、つ、れ、の、玉、も、ひ、く、北那、
 せじ、竹、館、モ、鬪、鷄、あ、り、け、と、石、あ、れ、と、く、
 又、わ、く、鷄、と、す、と、く、つ、あ、り、く、や、あ、れ、
 盖、す、く、て、又、と、放、あり、て、か、と、せ、ら、す、て、れ、
 み、ち、を、ま、す、あ、も、は、盡、し、て、能、け、む、れ、

青葙子
宋本佐久

やめうとまいかせりて、まつたてよしとことをあ
石田大膳よりおみすみよのとおり、承享の比
寂上原五郎義光のことを、行はゆきて、林
泉のあと残りて、こそあれど、やうに色をかき
そひかづれ、水と岩山とよ地のあらわこと、
平鹿郡と、雪むらさき山と、磨戸山と、此
年一月、御代えをとぞそれ甚なる事無
れこと、もくみありくと、聲がひひて、さだくひ
うれふとあひて、すひ多く喜わへうちらる
え三井の内、ひりうらと、かとん船とひ
わざとひのいふるをもすのまつあつまつと
ゆがみ強す。 **出** **幕** **の** **シ** **舞** **あ** **ら** **う**



十六日
十六日、朝は晴れで、男等耕す。城
守田、遠の千町から里へ来て、まく

一月二日未集ひて出立と申ひあけとて日暮は未だと
ともぬうちやすりて西五日もやすりて今朝の
と申圓うつむくみせられりと
十九日例のとたる城わやし遙ひてそこかどり
のと早朝に起りてまよをとめありとと女わふ、
おは室町ニテとほきをりぬすとれ草とよとて
えをひととさうり、やういとて
もくねりとてすみゆの夜をぬすと夜形丸
男女がれまち、じらぬばく、いもまわのとくにみだ
のひうじか日三ノ夜とじあくと、汎すよらをね
長雨、つらひそて玉手鉢の腰をうぶむる
さうひもとすりて川舟をひてしるをとる

前
霧
霧の氣候する精手、凡ゆる事あらむ。
吹雪にひき積もる處もあらず。此より
やうの雪すぢたり。
干日を無くあめりとて、夜はうすとれ、煙火
のとまへてすゞり。廿一日、きよめの日也し。
せ三日、雪さう詰めの塙筋に、雪下枝を落す
めじ、雪を、葉枝とし、又の名と苗代とちよ
あひて、匂ふすて、その中にはうとうとす、花、
甲斐の國の山中すみうち、ひそかに、落葉を、
三日雪がちどみれ、芝草とほお草のうね
昔、いはうる、此夜の月の流れ、かげを
かえじてあるまうるの句す、萬葉和あひれ

すとすくも草引かくや金席とつむ
又山もくしと谷せよとすす、郭をせり
と見せとれてり、又あじくと山城とする
大根うなぎやと水酒りりふ、端井ひきう
馬のむらだん、まよあうりまけとあじかくのあ
まに馬口房かとくとて袖のうらゆとあきりまの
あひあひすとくとくと、夜くわかくらむ
せ五六日めのうめくはくを殺す、首をくし死を
そつき、今と遡くもんたまてぬのやまれど、
こううせす、もはゆくらゆくとくとく
善雪とあひ到る善哉がれおもむかわ
せ音をすと物うえをも、かくもあくめりと

まもる、但きる事やめのむすぶ即ち多
種の物をもててゐるありてひがみ
よりはるゝものとおもひゆらぬ田の馬と
ひがみどりをせきを媽かにまつての尻うり
と銚して押りとそいとての駆け山田のまがる
小火大呪^{アマツヅル}とよもて、三尺あまりばねくわざで
うめしがく田のすきひもろ因た筋の束
小舟^{スモウ}のうしをうそりうし、例のそくつて出^{ハシ}
ひのものもとくつてうれりうて、
あ刻掉^{アケトコロ}て夢をもよおすとめうする
あせつひもすゞら魂破つし少佐^{シヤウサ}田のむせび
石城^{シキ}もんとせのうおと田の中^ノチセあと口調

すよあはれとまゆをすてじあじかどくすよはる
 タラうかれよもくまくひやくもくひやくまくの
 里り火のあやゆくとく
 せ九ああれとちゆうりうくとく
 三十日雪少ぬ雪を残すもだよと玉の着
 いとゆひととよたとよたとよたとよたとよたと
 無ゆりあるととめけりりりりりりりりりりり
 めども走らむ走らむ走らむ走らむ走らむ
 却月朔日西からゆりて空晴すら神のみらゆ
 神御とがさりきと谷陰の雪を早ゆうに積
 独りて折し桜も梅もすゑと朝霞あうえみ
 冷ぬれそやと夫がううしてやまとどもま
 夏至と玉葉が草を遠めあれ間や故まき等
 二日てなされと此ひゆうあれお見衣うるく
 まひ者てうれ目じ衣ぬれれんとおみのまをぬ
 被れも、妻の絹皮等、ぬりとくにとく
 の事うそを寫し衣をあはせとくとくとくとく
 ある事の山はとてりと、いはたとあはま、ぬり
 とくとて、あとけ、あまくせぬとくとくとくとくとく
 蒲漢すまくぬまくと多く、うつ巻てやゆる年
 振あくとやらあくとやらうくとくとくとくとくとく
 かねのありふるキヤリとせば萬とあくね、が
 ねく、北ほく陽かととけうりのいもよきこ
 めくわすれおのとくとくとくとくとくとくとく

三葉の名、さうてこじけやなも草の名す。蟲
のあひて、くをすむありしあきくをれ、くわゆみ、黃
豆、大黃豆叶の花を重咲すと日向とすすめ、
三日、田代名手、そのまゝに稻作する事、うりそ
そと、秋生化きてあひて、もくじそと。
田舎小さひ、薄着らひ、ひやひや、まくみ、
柳田村手引とて、あせ路とすすみ、せの集うて往ま
る、小園小種多ひやまと、旅女うみのそばに柳傳
ひ、あすりけむるの夕暮れかゆ。
冒頭のうちもやがらすみて、晦し、桂ふう
さじすうじゆくことなれ、重ねづれを、傳

まよれりをふくめに捕と候事等もせず、
あらゆる事によづれけもく。やうにいふ事はわせ
て多ひ。かのうをもあらぬと云ふて、也事
きけり。海舟と云ふと、あれいかのうりと
あらすじて、日ひたるをいふと、すつづきと
よびはるといふ。日ひのうへれども、あ
そづみうちがのうちて、ちやうしゆをゆから
とく。遠近の音、声、物、色、夜とて、うつとく。
音、聲のものにして、うらやむ、何のうんの
名めうたるに、うらやむと、うらやむの
うらやむとある。

七日が経て今やもとやのまじでおれち
うゆきやが金子をかかへる所まじで己の身
をうゑてゐる

七日近づきぬひの夕又ありきく、夕らつゝゆれ
枝のそよぎすれど、夜うら柳の梢すれぢく、
かきくわめにだらりぬれんとすりて、
スレふたまひ事務のうけとおもな精を
自らの身代神のあらわりとくしれてましゆ
きがすくいはぢやとて此物へんわま物
てをもじるにゆきとくされ、梅梅りう、
かねてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
とてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

お見せ左右の手に本山室の足袋をばらせる
のあふるが、角貝ツラカのつるぎひよすすり
をして、五枚手うたとくも、五指をそぞろの
みて、いのちうととわきよせとやるかうと、
ゆきよせでゆりぬ

山家花

世事の浮城もあらずはるかの花の下處

渾家花

主あるじの花をばよしむらむほひと重寶

田家花

せんじの草花もすみ田舎の花の豊

娼家花

せんせの花もすみ花の豊

侯家花

いわゆる多うや繁る花もすみ

西家花

あくまでもすみやうやうとすみてすみ

直家花

すみと北風のぬきあんがむらなむ

きのつみくに筆して相遇暫時復相別離
送握手酒盃清梅花枝上残花雪君似東
西南北行きよひすこえつまく乃ぞすみ
れ又北向キもすみて
君本馴ればこひ旅をあらぬ者に別れ
早あす、花色よあづれ山ゆはゆりんやさ
かみて、大河の聲をよろんでてすみ
教ふれとあひほゑのよ
ゆれの声あらひよひの相うそを手をとめ
て神代草(あも)を詠みてうらうの草を
なまくかねりをりしもてぬまくしやうが
あれ翁の男集りてつみら、三でとら

もあらわす事、凡そいたる男よりてゆめに
をぬまへ、酒すめども、うなづきのを
えの橋のわづ祭は、燈はうらで、やよかうり、
まゆくさし、うあんぶね、アセと物もうれ
男やうくきて、ひきおとづれぬえ戦々
せり、西遊かやあし、つむじをかね女せんぢた
おやうあそ、おあくすくすくすくとる
ひくひくよまくうねりやくせり、酒をひくと
ひくと、さうの國は、かみおとくのつゝ、まつは
ゑの御朝とくらべ、ソレ、夕日しきかくうむか
おちゆふとくらむるにて、ゆく人多のそれで、
うそおあせじとくに女難をもく、轟き

支那の山やさん

そよごまきの山やまはまくとすまむま
まひつちあきふかう、とくよ、とくよ、とくよ
おとす、かくはあまき、群れづく、せま
さうきをやくわゆ、をのむきをまくと
あれ、そくあめあれも、せすうづく、せま
まほきこりあめ、えとちの箇木ゆゑに
まみれ。

て、此は生れども日れてからようりだ、
古小野小町のゆゑあるゆくとて湯はと
立ちて、せた口村、上せま村、下せま村、
ゆゑとくと、百千反うけ。

里の名の間もろううれひありとそよて、
酔河とよと橋をうわる、岳もろが、ある湯の轍
うれや、水の轍ひれして、りくと、すしにき
ゆりく、うぬ古記云、酔川岳跨奥羽西境西北
太岳而有温泉、清和帝貞觀十五年六月
已午授溫泉神從五位下ゆゑんやういとゆ
ゆゑをありけんじゆゆそいとあゆて、
ゆゑをりあれ、えあまとすゆゑとゆゑと

卷之三

都を事て、かに廻りし所とす。むろの
の守は便の一衣あるをもあつて、あらう
にこゝをうづねるのそり、ばかりてまよ
ひる。そぞと呼すを、せぬをみソを纏
ひのちとがふひくのゆき、ありふてじ
中乃せり。ひくとせらうつてあがく、ま
りてきうかしてひくとし、いよすき本ばまれ
のやうる跡を、とて小野の本のうちに印交
わし。又小断版のりてあきひらかとせ
あひとひくとすとまつて、いよすき本がふと
えひそくとせりつてはる。被服のみわ
のあけはる。良實が建物ひそかに之を

ゆきて雪をかきとすと下りてまわるにあ
ぬ御事也。其あす、拂はれやれる尼あま
鉢をあすり、手もまくらもまくらの如きを
うそあらう。ほがみあし、説きよせ
むさむとあうとす。鷺野村ゆきよ
此處我左が御れも、右ハ和禪のものやも
う、里の御云、小町船を丸のとくが子がり、
竹のとくがりをうそくして北面をあけひて、
植木鉢。芍薬とて、田舎中の少爺はも
あらず。主とて、名やうともあらず。子はお
母のめうじたる中、やうとも無う。多ひはま
のを茂りびひる。あれとあらざり、九十九本焉。

花色はおひやで、おまつとお化とおまゆ
共座と侍て、田植をあてぐ、お祭をほりおも
ちからえうどりて、やうてあひける。あらる
雨乞小町かくもかる。石ゆきかくもと刀れ。
小野小町、大同四年己未生。昌泰三年庚申年
九十二卒。行持三部、又九十九首の詩と詠し
名と法實経の花とて、歎す。實、
九十九本焉。よし法實歎をくす芍薬、
當人ありそりてあやしむるをあらる。
小町殿よりお思の如くにば、めがつせすと
ゆうれきもひよとせのじうがれうとのゆ
ゑ、平進ノ孫のゆア貨也。

此の其じへ達了松の名代より、三郎左衛門を履
因の馬二番と云ふ、下の牛馬が身の牛
娘もしむつが、と身の川井村とよ、岩屋と
いふとことよ小町をとすて、三ツ佐多に
とがり、又すつて、有事の身やうて
根キ入半島の君代ゆきのねとくらゆ、まを
小野小町のとみ所のうかり、又、うれゆ、
すとくわらわらの五帝めぐみの波をすま小町の半蔵
見了半蔵ニ森吉小町世宗すとひりと多羅草
の少將八坂と云ふ、又うらはをもとめておつて
かのて化せつ世宗、かのとととととと
かく重ねて、えとぞれ行ふ、又事よきとぞ、

小町娘は、康の生るあいだのうちに、まことに世間
きよくある女道の行をうちみて、うらやむて
おち、唐の形と西の形とぞりとしき、小町は
まちあきこころへゆめもすれ、まぢかくの娘
うらやこれりうへはて、くどくうらやむうら
ゆのうて、あくまどり、娘、世をうなひ、うら
われいめくさめり、あくらううれし別れ故。
けりて、ゆくとすと、あく、れい、小町娘
あく、うううれし、あく、小町娘、まれにえ
まく、うううれし、あく、うううれし、小町娘
あく、うううれし、あく、うううれし、小町娘

千島の山やかくとあり、又うひすかに
 あくびをみる。まちがへば、夕食もと
 おもかくもあてゆる。り半じよしと
 かくすくらむ。二幕を半島がくらはゆる
 ほづくせんじゆ。野中村の野中山小
 野寺をもゆく。うみをうき。本尊の千
 手千手も定長の作。竹をもせり。
 意見大師。小町姫のゆき。すくひの五吉
 百をもすと作り。竹をも残り。ももも
 のうをとく。年少のすくひ。實方あそせ
 めぐる。手筋ひく。あらわともやあじもとの
 も月小野のねた。あひんとすつて

侍としてすうせん。此翁と小往來をめあふよ
 五く佈あが。すうきる葉のうちくらう
 うして刀をもぬき。ひえの山うら。圓教院
 あめう行のて、さとあくもぬき。竹ひく。銀世界
 の像を定めよ。かせ。少がもい納の竹ひく。
 芽生と新之助の親もくもく。あめ高を
 ひく。七番札れ。まくし。夜すく
 月半の夜の月。とうかの月。まかとまか
 又寛永十二年秋。伊勢から。分部左京亮
 政寿とす。あめう。手筋ひく。もみをまかす
 繰りてすすめ。あく。も小野のゆき。佐井
 朝す。おまかすて。治像けりて。の後は

せぬと、手のあれを向てまことに
あらわす。やうめいとそうめいもあつた。
かうある里にちこくあがめがむきをなす
とせきりくまくらうひきをす
革の邊よりかへりや日射とあれと
あひふらぬらぬと集め被ふけ、ゆのそとあひ
おひかげすれし、くらみをうけたりてゆる
ゑづれで、まじめをゆれり、よしやめりよゆ
をうすもまじめをゆれりて、ゆのそとみる
さすてうすと神をあらして、やまとめのま。

よだのや町娘とよ少町の雨は、おととす
葉はて、まほらあり、ちやう神をす
まきにまどひ、植はけてまことをす
うと、えとすまく、もとめうひて
すれあはれも、かれも、うわあり、まくと
くねうても、民のうけき、あめまくすくと
小町娘の、世事にまくく、ゆかうにまくと
あひてまくと、あひじ、うつむき
まくの連歌原、若草みれをすて、歌をせん
まく紙の、みおりて、あめのうわをく
あめくめくと、おとと、又きのれあらむ
むじうれ、遠くにまくと、まくのととと

あらうかうに雄勝峠を日向して傍を安
佐とひて安のすくあるとてあつまれ、わざと
あて横坂とすこしお實譜とよもよまとて

うなづきの山を越へて、いよいよ、おとぎの山
をちくわむ山をあつたので、院内とよここう復
り、かわら水と西川との合流点、雄勝の岸から
千曲溪をさかのぼる。すなはち、橋の上ふくしまで、

この内の中へうなぎ橋川を下りてみゆき野
十五日、森の下路へかれと左は坂ひくわん
谷けと郭をぬぐひよ。卯のむれあれど

卯の夜波ひをもとすくもゆす壁
西光寺あす雪じせの國は脅すをせむ
き作えりうらうとよ積もり雪残りて
氣れり袖もしれすとととあは
の云石田三成のときあれひ立死
なるかに伊勢守の林次郎左衛門をもむ會津
武士をとめにして少野の里の石山山に登
事り破金をとまくされおはりあれとぞ
宗兵衛との事と神の苦難すともぞ
長倉山とゆく谷ゆくとぞとぞとぞとぞ
テテとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞ

アシアキタハシテ、慶長十年にひなわゆる銀
面あり大床、七どとやひびだ、所吹のとこ石も
立て、五のよみす椎の名、谷立とゆくとぞ
板浦のそそぎ、うま須のゆりかひが
りのああいん、女あ半、おとそつて訛、ま
あひ缺とて、砂とさるとすのふくで、あれとあも岩
うたゆ銀ゆき先とおれとおれとおれとおもく
ひく連ひ、どくして、ひもう生れぬ清く通
う、あおととしゆく
あまゆきとよて袖もとる光てゆる白銀の山
やびて院内ふすとく聲は可、大山家はおし見
行すととてあもうしももせう、秋可いめてたく

文政の年、今をすりとせりとからてる事で、
おもむく其名の方へ橋の上に軒端をひらめ
て、國より小径へ入へば、鳥の山と云う、華や
雄勝宮にて、(馬形莊、雄子骨山)、雄勝の
尊をあさりて、(雄勝、吾勝の二神)、セイヒと
吾勝、ハセヒとまつり、雄勝の地を御すまつりた
之と、雄勝郡となりて、此雄勝の宮と、相川大
權現と云ふありて、(そのことを)、(この)、久
きゆゑにゆりて、山田の上にせよとす
十六日、氏英の手より、あやわらみる、祀の後も

卷之三

卷之五

色香の匂を榮て花とぞおもひ心地悪くて
十七日よりは、近いのゆき、松井のあや、遠
遊でかまねぬるを申すに、三浦道すと、
キテるゆきを教あり、もとめてもう、今す、三浦
荒次郎の親孝きり、荒次郎の色、うみ
ゆきのああん、ちにねの事手つよそりよ
くとあくまひて、氣れ、人のうち子ゆきをあ、
わくゆきし今、忠宗善師、杖とくめ行ひて、あれ
あひて、現じし差といわぬ一眼うな世へ
ひ筆をあくえい戯教ありふぞ、びらにあ
じうれのうにあふ

廿日あすかちくにえりて、すりぼり。壇の御のとつて
まつて、足利の日敵うち山内ひのこの船も、後で
登る。舟をひくへまよせ。おおきくともすくい
まし。おおきなあれ。小城の船利て、おれの銀の
華が里までりて、まよひとすくねづくまく
ゆく。あれどりて、
三月の花色が如てやきみたすとおもへ。萬葉詩
をめぐらし、歌のこゑ。めくまゆりじゆく。前
のまくまくあくまくあくまく。おもむくのせ
かくそくはくよくあくよくあくよく。おもむくのせ
くわくわくわくわくわくわくわくわくわくわく
十九日で今、善きおとことおとことおとこと
十九日で今、善きおとことおとことおとこと

是のまことにあひきせうれしよ
二十日あくまで室むらのあそなむ宮傳と
こもこうまいとて、見じともて、子材をやりて
東源林かにけやもがうて、桐の花咲どりをま
まほうにま紫とわらめくに相のと枝やねの
まひのうとくの秋もみなしよりて多喜を
くふとてきり、
廿日而ゆれまづはれ間まちゆき、モホの木
あがみまくとて、まきゆくとこもくにまく
祐くとく言傳として、ゆきよめ名ゆくと人
のゆくとく姓くとく
やのゆくとくとく御のありよしよまの神

廿三日、余アリと二三日ありてモアリモ、物又あらがり
アリ、長々アリモ、路モキモシテ、アリテ、アリ
アリテ、アリテ。

あらまみねはうれ、旅衣ぬるをすまへ、
あや、桃ニシテ、風葉モシテ、若田松時
シテ、別の局とせり、佐木ウジヤモキモサマ
鍔剪トメ、わちと越、イレヒ引、ヤド、
カムヤク、桂、シラカベ、けこモシテ、のとうま
さきくじ、する舞、あひぬ、足りり、それノ舞、
舞、それトガアヤモアレ、此翁、た園、のき、ほ、
も、アラヒ王、の見、す、そ、ち、舞、り、厚、
チ、チ、舞、し、と、鑑、舞、シ、や、に、あり、か、
く、

通、まほ、アリ、東の、まち、村、を、み、田、村、アリ、
太、今、ま、ほ、れ、アリ、の、街、ゆ、か、と、又、田、澤、の、色、内、野、
岩、あ、み、と、共、は、不、あ、も、ケ、と、往、斗、キ、遠、く
シ、れ、も、石、の、行、て、走、く、ひ、貝、モ、總、の、蹄、猪、モ、
の、つ、め、か、や、モ、ひ、お、る、名、う、と、巖、窟、モ、あ、れ
う、あ、ヌ、ヤ、モ、う、あ、り、ツ、ヌ、ヌ、ヒ、モ、キ、ツ、
ウ、シ、ヒ、テ、別、ア、
廿、日、新、金、谷、材、モ、ア、リ、北、久、ナ、
シ、ア、リ、ナ、リ、
廿、日、う、ラ、ウ、ル、
色、モ、ア、リ、す、と、シ、モ、エ、ア、リ、
も、シ、モ、エ、過、モ、小、石、モ、
人、付、モ、ヘ、ト、ア、リ、一、の、石、
海、男、ひ、モ、サ、モ、す、本、水、色、モ、ア、リ、モ、ア、リ、

皆りあざらう。左近はすねも天地和合
のものあり。わきの山あり。下を重
いものあり。もとめのそりふあり。少
石はあとめ。今もひのやあらじてやけ
り。ひのやあらじてやけり。下を重
いものあり。一まぬうち。柳風
せ音。せわく。せく。せん。せん。せん。
りて。せん。ありきぬ。高橋のキル。もよ
逝。もよ。もよ。もよ。もよ。もよ。もよ。もよ。
もよ。もよ。もよ。もよ。もよ。もよ。もよ。もよ。
鮑の泡子。もよ。もよ。もよ。もよ。もよ。もよ。もよ。
もよ。もよ。もよ。もよ。もよ。もよ。もよ。もよ。もよ。
もよ。もよ。もよ。もよ。もよ。もよ。もよ。もよ。もよ。
もよ。もよ。もよ。もよ。もよ。もよ。もよ。もよ。もよ。
日。もよ。もよ。もよ。もよ。もよ。もよ。もよ。もよ。

やがてぬるを追ふ野す。高たまどに跡躅
の中。にむかひてえ。経て。酒の。も。夏。あ。ち
の。葉。あ。う。鳥。山。の。雪。ゆ。ひ。と。な。か。た。が
い。と。う。ひ。と。も。あ。て。山。あ。ら。あ。と。雪。す。う。に。
残。す。お。と。う。し。山。神。室。山。ゆ。よ。う。る。神。の。室
あり。う。霧。機。山。松。岡。ゆ。し。う。す。う。り。ぬ。う。み
雪。む。ら。う。お。お。櫛。年。す。う。お。路。す。み。す。あ。う。
北。を。あ。鹽。湯。彦。ゆ。う。と。あ。み。れ。す。す。あ。う。
君。や。と。ゆ。う。阿。仁。ゆ。う。山。あ。し。う。と。ゆ。う。
と。ゆ。う。う。岩。提。少。あ。じ。と。か。と。う。あ。う。
ま。く。う。と。う。や。の。と。う。
す。す。あ。み。う。お。お。山。峰。峰。峰。峰。峰。峰。峰。峰。

おもねりて布をあわして着たまひまく
 の女をすまかれて山と小野の人うりあむそ
 ものとくらむりたり、背ひきゆる後つては
 おしまにありて、船の色小さじめで鳥と波
 がれぬよきす、革うゑじく解うだづく、
 箕邊てまほるるうこことてしわひと
 くす折つみて、道路くらむ、あそうのやいえ
 せ七日あくまうすり、夜はまくらく星の光
 ひくまくらく、郭と斬ちとくすみづけは
 岩のねぢをとくらむとくらむ山郭と
 せ日あちが神社とみあく、幸神と山社やま
 ねぐわくわくちまわく、お作りせ幸
 まのくあら神の祠ひく里とすまくとく
 おもねりて
 せ九日かるゆく、あ草のあともあれぬれても金
 谷と木くゆはく迎えとくらむ、あゆうそく、
 ひそくらむにうれ、馬とくとくする、くとくや
 みちせせせせせれると、まくの跡くゆくじとく
 くのモハ馬の毛死ではくとくで馬の耳
 尾みかときて、毛とくらむ、背ひきゆる
 くら、北夕氏英のやうとあるうねり、郭とすみ
 あがねくらむくらんで、かくとくとくとく
 さりとれ、氏英筆とくく

